



毎週水曜日午後7時前、成羽文化センターに扇子やおもちゃの刀などを持った子どもたちが集まってきます。地元の伝統芸能備中神楽を習うためです。練習に励むのは、成羽備中神楽育成会の子どもたち。成羽町だけでなく周辺の地域から神楽に魅せられた5歳から中学1年生までの21人。

基本となる「猿田彦命の舞」から習い始め、上達するにつれて「導きの舞」、「事代主命の舞」、「大國主命の舞」、「櫛稲田姫の舞」などその子にあった舞いへと進み、さらに、酒造り、大蛇退治、吉備津舞を習得していきます。

指導は、地元の神楽師があたります。数人の指導者ごとに分かれての個人指導。「畳とかかとの間には、は

成羽備中神楽育成会
代表 住田光生さん(42)

伝統芸能に魅せられて

がきが一枚挟まっている感じで歩くこと」、「太鼓のリズムは、体で覚えてらひとりでにできる」など、いねいに教えられます。手の空いた子どもたちは習ったことを自分で体を動かして確認します。

高木建くん(成羽小・5年生)は、「始めたきっかけは2年生のころ、友だちがやっていたから。学校とは違う友だちがいるから練習も楽しいし、お客さんが喜んでくれるのが嬉しい」。子どもたちは、地元の祭りや敬老会のイベントなどに50回ほど舞台を踏みます。

貢くん(成羽中・1年生)を問わず母親の埴美代子さん(47)は、「小学2年生のころ、家にあつた神楽のビデオを見て興味を持ち習い始めました。人前でも恥ずかしがらず、声も大きくなりました」と話します。

「伝統芸能を教わることによつて、礼儀作法や話し方、立ち居振る舞いなど大人になつて、恥をかかないように日本文化



の良さを理解してほしいですね」と指導者の大塚芳伸さん(54)。子どもたちが大きくなつて指導者になれるような舞い手になつてほしいと願っています。



備中松山藩で藩政改革を行った山田方谷(1805〜1777年)の生誕地、中井町西方出身の藤井博さんと義和さん親子が、方谷が開いた「長瀬塾」の復元模型を完成させました。

藤井さん親子は、方谷生誕200年をきっかけにして製作を決意。一級建築士の資格を持つ長男の義和さんが、県庁に勤務するかたわら、方谷の関連書籍や絵、高梁市史などを頼りに図面の作成を担当しました。材料の調達と組み立ては、父親の博さんが行い、約3カ月かけて完成。模型は、50分の1のサイズで、縦73センチ、横103センチ、高さ40センチ。

講堂をはじめ、寮舎や居宅、蔵など7棟と松や梅の木を備えた庭など、忠実に再現しました。組み立て作業は、深夜2時、

山田方谷「長瀬塾」を再現

藤井博さん(77)・義和さん(55) (中井町西方出身=岡山市在住)

郷土の偉人に 思いをはせ

3時まで続き、博さんの奥さんは「いつ床についたのかわからないぐらいがんばっていました」とその熱心さを話します。

博さんは7年前まで中井町西方で生活し、土木や建築関係の仕事を経験。手先が器用で、これまでも法隆寺「五重塔」の模型を手掛けています。「とにかく細かな作業続きで、礎石(柱の下に敷く石)には小石を使用するなど、できる限り当時の様子を再現しました。材料の下準備などが手伝ってくれ助かった。大変だったが手掛けてよかったです」と振り返ります。製作の監修役を務めた義和さんは「山田方谷に学ぶ会」の会員で方谷の偉業を本格的に研究。「方谷さんの考え方や生き方は、あこがれと尊敬。自分の道しるべです」と感慨深く話します。

模型は、文化交流館で開かれている「山田方谷の世界展」(6月26日まで)で展示されており、話題をよんでいます。

学園だより



「スポーツ社会学科誕生」

吉備国際大学 社会学部スポーツ社会学科講師
高藤 順

今年度から吉備国際大学・社会学部の中に「スポーツ社会学科」が新設されました。従来は体育系といえば「体育学部体育学科」といった名称でしたが、時代の流れとともに「体育学」から「スポーツ科学」へと視点をひろげてきました。これは、「スポーツは一部の限られた人だけのものではなく、すべての人に与えられた権利である」といったユネスコの精神が導入された証だと思えます。

スポーツ社会学科では、「社会学の視点でスポーツにアプローチすること」をコンセプトに、スポーツの社会的機能についてグローバルに理解し、スポーツに関するコーチング能力やマネージメン

ト能力を養成し、将来のさまざまなスポーツニーズに対応できる人材の育成をめざしています。

僕自身もJリーグ（日本女子サッカーリーグ）をはじめ永年サッカーに携わってきましたが、サッカーを通して数多くの出会いや感動、そしてたくさんの方の事を教わりました。スポーツの楽しみ方というのは「する」ことだけではありません。

スポーツを「みる」ことも指導者や審判、そして運営など「支える」こともスポーツの楽しみ方の一つです。まだまだ勉強中の立場ですが、学生にサッカーをはじめとする「スポーツの素晴らしさ」をぜひ伝えたいと思います。そして、高梁市民の皆様にもその素晴らしさを知っていただければ…と思います。

編集後記

川のせせらぎの音は優しく、山々の新緑が鮮やかな5月。花粉症のピークも過ぎ去り過ぎやすい季節がやってきました。
今月号の「わたしの健康づくり」では、フォークダンスをされている皆さんを紹介しました。取材では、いきなりメンバーの皆さんと一緒に踊ることにになり、びっくりしましたが、動きをわかりやすく教えてくださったおかげで、輪をつくって楽しく踊ることができました。輪は、心でつくるもの。

初対面でも初心者でも、心が一つになれば誰でも楽しめます。みなさんも仲間を集めて健康づくりをはじめませんか。
健康づくりの取材をおして、市民の皆さんの、心の温かさに触れ、このような場所や雰囲気は心身の健康づくりに欠かせない要素だと感じます。
私自身も健康について考え直さなければと思う、今日この頃です。これからも、人とのふれあいを大切に、笑顔絶やさず頑張っていこうと思っています。
(T・K)



わたしの健康づくり

笑顔で楽しく踊りましょう

うかんフォークダンスクラブ

代表 土井泰子さん(73)

月に2〜3回、午後7時から9時までの約2時間、有漢地域センター内の「健康づくりの部屋」でフォークダンスを楽しんでいるうかんフォークダンスクラブの皆さん。メンバーは有漢地域からだけでなく、近隣の地域からも参加しており、現在は50代から70代までの

11人。そのうち男性は2人。軽やかな音楽にまじって楽しそうな笑い声があふれ、ダンスのステップを間違っても気にしません。
同クラブは、ダンスの講習会に参加したり、他のフォークダンスクラブと一緒にパーティーを開くなどして交流を行っています。
また、老人ホームや地域の芸能発表会でダンスを披露しています。松山踊りにも毎年参加しています。
代表の土井さんは「踊ることが好きな人が集まって、楽しみながら健康づくりができています。ダンスの動きを覚えていくことは頭の体操にもなるし、何より覚えられたとき達成感や充実感が持て、自分を高めていけるというところが嬉しいです」と話します。



輪になって踊るメンバー